

日本語複合動詞の習得状況と指導への問題提起

—中国西安外国語大学における「～あう」「～こむ」の調査を中心に—

陳 曦 *

The Acquisition of Japanese Compound Verbs and Implications for Teaching:
An Examination of “*au*” and “*komu*” at Xi’an Foreign Language University

CHEN Xi

Abstract

Japanese compound verbs often have various meanings and the rules governing their formation are not constant. Thus it is difficult for learners of Japanese to determine their proper usage. This study investigates how Chinese learners acquire the compound verbs “*au*” and “*komu*”, which are often used in Japanese. A grammaticality judgment test and composition test were conducted to determine the most common compound verb errors made by Chinese learners, as well as the mechanism of language acquisition. The Prototype Theory, which is a model of graded categorization in cognitive science, provided the basis for analyzing the study findings.

The results indicate that many learners are not able to adequately perform classification of the meaning of compound verbs. In addition, learners tend to believe that the meaning of compound verbs is the combination of the original verb and the prototype meaning of the rear verb. Therefore, learners have difficulty understanding verbs that change their meaning slightly in combination with other verbs. It is clear from these findings, that there are problems with the current teaching of compound verbs, as well as Japanese language dictionaries that are commonly used in China.

1. はじめに

本研究は日本語複合動詞習得に関する問題点の考察と、今後の指導法に対する問題提起を行うことを目的とする。そのために、中国西安外国語大学で中国人日本語学習者における日本語複合動詞の習得状況に関して調査を行い、その結果に基づき考察した。

日本語の中には、複合動詞が多く存在している。森田(1994)によると、『例解国語辞典』

の見出し語の40,393語のうち、動詞は4,622語(11.4%)で、そのうち単純動詞は2,083語(45.07%)、複合動詞は2,390語(51.69%)である。実際には「～すぎる」のようなどんな動詞にでもつきやすい語のついた形は辞書には収録されていないので、複合動詞の数はもっと多いと思われる。多様な複合動詞が用いられ、前項動詞と後項動詞の結合条件が明確になっていないため、学習者にとっては理解が難しく、記憶としても定着しにくい項目である。特に結合する本動詞が多様な意味を持っている場合、どの意味によって複合動詞

* 名古屋大学大学院国際開発研究科博士課程(後期課程)

が作られているかがわかりにくい。複合動詞の意味は単純に結合する二つの語の意味を合わせた意味になるとばかりは言えない。しばしば数多くの複合動詞それ自身が独自の多様な意味を持つ。そのため、複合動詞は日本語学習者にとって習得困難な項目であるといわれてきた(森田 1994)。

そこで、解決すべき課題となるのは日本語教育において、複合動詞をいかに教材や授業に取り込んでいくかということや、どのように指導していくべきかということである。そのためには、学習者はどのように当該項目を理解しているか、どのような点が習得困難であると感じているかを解明するといった基礎的な研究が必要となると考えられる。しかし、現在複合動詞の使用実態の調査や習得順位および教授法に関する先行研究は極めて少ない。

そこで、本研究では西安外国語大学で日本語を学ぶ中国人学習者を対象にして、複合動詞の使用実態、習得状況を調査することによって、複合動詞の習得順位の探索と、教授法への考察を深めることを目的にする。

対象とする複合動詞は調査前に行ったアンケートでも学習者の知っている複合動詞の中で上位に挙げられている「～あう」と「～こむ」を取り上げる。コーパスを用いて複合動詞の出現頻度を調べた研究でも、この二語は日本人の日常会話でもよく用いられ(玉岡 2004)、複合動詞後項の中でも結合する動詞も多い(国立国語研究所 1987)。このうち、複合動詞「～あう」は前後の動詞の意味をそのまま合わせた意味になる語以外でも、意味が比較的単純に類推でき、理解は容易であると思われる。中国語との比較では、「～あう」には対応する中国語「相互」があり、中国人学習者にとっては理解しやすいと思われる項目

である。他方、「～こむ」は多くの語義を帯びる理解困難な項目であるとされている(国立国語研究所 1987、松田 2004)。

よって、日本語複合動詞全体を探る上でも母語の影響を調べる上でも、対照的でかつ日本語の中でよく用いられるこの二語は大変興味深い。従って、本研究はこの二語を取り上げて複合動詞の使用実態や習得状況について調べることにした。

2. 先行研究

従来、日本語複合動詞の研究は多様な結合様式を整理しようとしたものが多く、前項動詞と後項動詞の意味や格支配の観点からの分類が行われてきた(寺村 1978、山本 1984、影山 1993、由本 1996)。また、姫野(1999)では複合動詞全般の意味分析がなされてきており、複雑な多義の意味を整理するとともに、類義語との意味的な差異を明らかにしている。

一方、日本語複合動詞の使用実態についての先行研究は少ない。その中で、松田(2004)は第二言語習得研究のための複合動詞習得の実態把握を目的に基礎研究として研究を行った。具体的には認知意味論の手法を援用して、「～こむ」の意味的イメージを図式化して統一的な説明を試みている。

また、松田は学習者の持つ語彙能力を知るため、学習者の持つ意味知識(習得内容)を扱っているが、どの項目が早く習得されるかは母語を含めた習得環境に影響される傾向が大きい(松田 2004)ため意味習得の支援に重点を置き、習得のプロセスには着目していない。また松田は韓国語、中国語母語話者を扱っているが、母語干渉などは直接の対象としていないため、その点が不十分であると考

えられる。

本研究では学習者の第一言語を中国語に絞っており、その点での統制が比較的取れているため、習得順位も考察の対象とする。

3. プロトタイプ理論と日本語複合動詞

近年、第二言語習得研究に対して、プロトタイプ理論などの認知意味論を応用するケースがみられる。プロトタイプ理論によれば、あるカテゴリーの習得は典型的なメンバー（プロトタイプメンバー）から始まり、徐々に周辺のメンバーへと拡張されるといわれており（Rosch 1973）、習得順位や言語習得のメカニズムを明らかにするために有益な手がかりを与えると期待される。特に、本研究が対象とする多義的用法の多い日本語複合動詞には応用がしやすいと考えられる。本研究ではプロトタイプ理論を援用し、複合動詞「～あう」と「～こむ」の中国人学習者のプロトタイプがそれらの複合語の習得にどのように作用しているのかを明らかにし、習得上の問題点の解明、及び複合動詞の指導法に関する考察へと展開していく。

4. 調査概要

4.1 調査の対象と期間

本調査の対象者は中国西安外国語大学で日本語を専攻として学ぶ中国人日本語学習者、約 100 名とし、複合動詞の履修とその表現が可能となるように、学習時間は 500 時間以上、すなわち中・上級レベルとした。回収できたのはアンケート 105 部（有効回答率は 100%）、文法正誤テスト 64 部（有効回答率は 60.0%）、

作文産出テスト 53 部（有効回答率は 50.5%）である。調査は 2004 年 2 月、3 月に行った。

4.2 調査の内容と方法

まず初めに、学習者の複合動詞に対する認識を把握したうえで、今後の効果的な指導法を考えるために現状の指導法や教材の問題点に対する意識を調査するアンケートを行った。

次に、学習者の複合動詞に関する理解度を調査するために調査文（表 1 参照）が受容できるかどうかを学習者に判断してもらう文法判断テストを行った。

表 1 文法判断テストの例とその結果

項目	正誤	正答率%	例文
抱きあう	○	95	分かれていた母と娘が再会して、しっかりと <u>抱きあった</u> 。
隣りあう	○	33	バスで先生と <u>隣りあって</u> 座った。
流しこむ	×	43	流し台でコンタクトレンズを <u>流し込んだ</u> 。
沈めこむ	×	17	スイカを冷たい水に <u>沈めこん</u> でください。
走りこむ	○	43	大会に備えて毎日十キロは <u>走りこむ</u> 。

注）○は正用法，×は誤用法を示す

また、誤っていると判断した場合、その理由も記してもらった。調査文に用いた複合動詞は意味的に満遍なく拾うために姫野（1999）が分類した複合動詞の中から、日本語母語話者二人に判断していただいた実用度の高さより「～あう」を 23 個、「～こむ」を 37 個選択した。

また、学習者の産出能力と誤用について調べるために作文産出テストも行った。作文産

出テストは単語のみを学習者に見せ、自作の作文を産出してもらった。これらの単語も文法判断テストと同様に姫野の分類ごとに「～あう」を12語、「～こむ」を30語選んだ。作文産出テストは学習者の負担が大きいため、項目数は文法判断テストより少ない。回収した作文は日本語母語話者7名に依頼して受容性判断を行ってもらった。判断の方法は、受容できるかどうかを3段階で回答してもらい、不自然な場合、どこが不自然かその理由を提示した選択肢から選び、どう直せばいいかななどのコメントも付記してもらった。

5. 結果と考察

5.1 文法判断テストからの考察

本研究では姫野の意味分類ごとに調査文を作って分析した。その結果、姫野の分類内で得点のばらつきが大きく、意味のカテゴリーとは別に学習者の習得の段階に応じた分類がなされるべきであることが分かった。さらに

姫野の分類は詳細すぎてこのレベルの学習者の習得状況の把握には役に立たないことが確認できた。また、当初想定したような「～あう」と「～こむ」の正答率の平均値の差は見られなかった ($p>0.05$, 図1参照)。それは、「～あう」の正答率が予想よりも低いものが多かったことに一因がある。「～あう」は中国語の「相互」と対応できると考えていたが、本動詞にそのまま「～あう」のプロトタイプが結合できる場合は少なく、ほとんどの場合、「～あう」から意味的作用を受けたり、意味のニュアンスを変えられてしまったりするからである。そのため、「～あう」のプロトタイプが結合した意味以外の習得は「～あう」のプロトタイプからの類推すら難しいことがこの調査でわかった。

理解の点から見たところ、学習者は「抱きあう」のように「～あう」のプロトタイプの語義、すなわち、相互の時間的制約の含まれない作用・動作を表す用法、しかも中国語と対応できる語「互抱、相拥」がある複合動詞

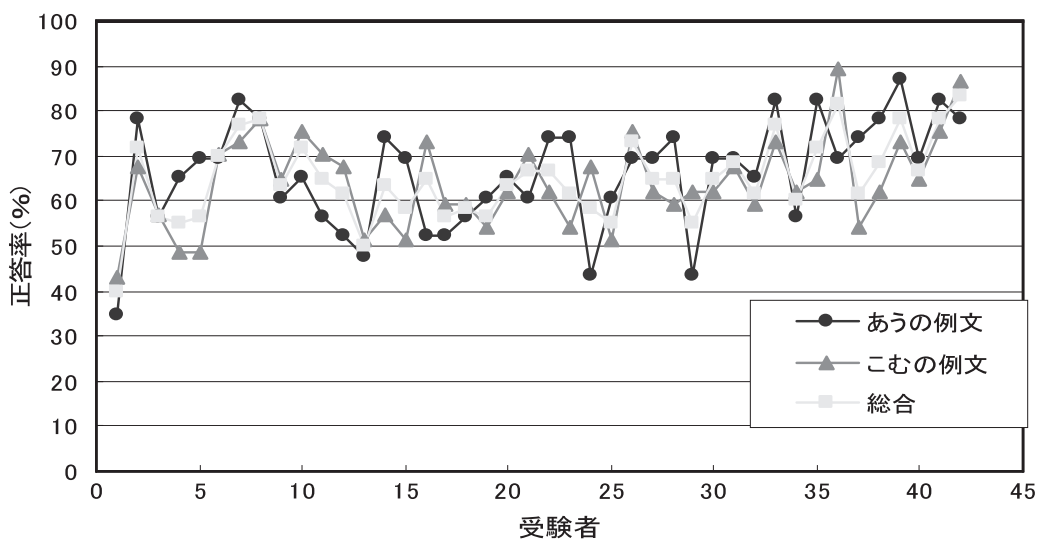


図1 個人別の正答率

は最もよく習得されている。しかしながら、プロトタイプの語義を超えた語義の拡張には困難があるようである。特に、「沈黙しあう」や「騒ぎあう」のようにただ同じ場で動作を共にするのみで、主体同士に作用がないような、並行動作を表す「～あう」は理解が不足している（「沈黙しあう」の正答率は38%、「騒ぎあう」の正答率は33%）。また、本動詞の意味から大きくずれるような「請けあう」や「とりあう（「とりあわない」で使用）」に代表されるような慣用的な意味や、「隣りあう」のように相互作用の意味を本動詞自体が含んでいる場合に結合できるかどうかの判断も困難なようである。（「請けあう」の正答率は67%、「とりあう」の正答率は71%、「隣りあう」の正答率は33%）

「～こむ」に関しては、学習者はプロトタイプの語義を内部移動、強調と捉えているようである。特に、ただの強調と捉えているのは問題であり、過剰般化を引きおこしてしまう可能性がある。また、内部移動でも、その領域内にしっかり入る（簡単に抜け出せない）、強調でも程度や状態が変化したり、繰り返す様子であることは確実に認識されていないと考えられる。学習者は「沈めこむ」や「流しこむ」のように語としては「～こむ」と結合しうが、文脈上多くが不自然となり本動詞のままの方が望ましいものについても習得上問題があると思われる。（「沈めこむ」の正答率は17%、「流しこむ」の正答率は43%）

5.2 作文産出テストからの考察

産出面から見てみると、学習者は、後項動詞「～あう」と「～こむ」のプロトタイプの意味は習得していると考えられる。そのため、本動詞の意味にそのまま後項動詞のプロ

トタイプが付け加わった「黙りこむ」や「助けあう」のような複合動詞の習得度は高い。このタイプは文脈上、本動詞「黙る」「助ける」の意味そのもので使われており、これに複合動詞「～こむ」「～あう」のプロトタイプの意味が付加されている。この調査から見える複合動詞の習得に対する傾向から結合による意味の変化の点でタイプ分けを行い、図2に示した。「申しこむ」や「請けあう」のような一語化して、本動詞の意味とは違った新しい意味を持つような語は学習者は一つの新出単語として捉えているためか、比較的、よく理解していた。これらは、学習上は一度覚えてしまえば済むことから、初期導入さえしっかりすればよいといえる。これに対して、学習者が最も使いこなせていなかった部類に入るのは後項動詞と結合することによって、本

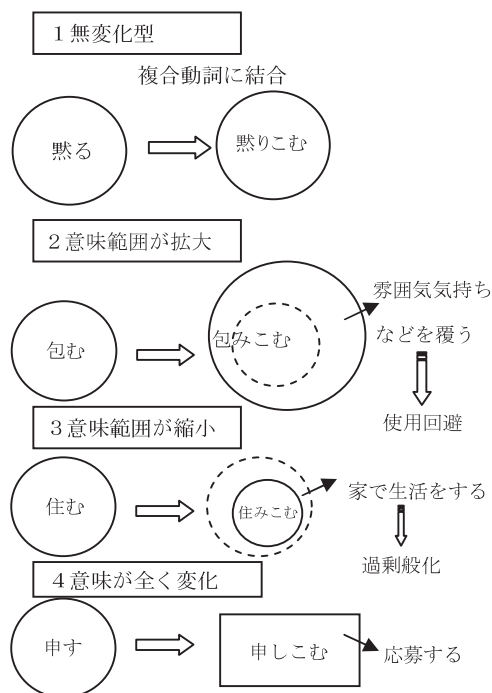


図2 複合動詞に結合する場合の本動詞の意味範囲の変化

動詞の持つ意味以外に新しく意味が加わるタイプや、逆にもともと持っていた意味よりも意味範囲が狭くなるタイプである。

本動詞の持つ意味範囲から狭くなって、新しい意味を持つパターンも日本語複合動詞には多い。意味範囲が小さくなると、本動詞のもともとの語義には含まれていて、かつ、複合動詞化することで狭くなって、正しい語義範囲からはみ出してしまった部分で用いた場合、過剰般化を導いてしまう。また、新たな意味が加わるタイプでは、その意味を知らないと学習者が使用できないという現象に結びついてしまう。ところで、日本人母語話者は、このタイプの複合動詞を本動詞のもともとの意味で使っている文を見ると不自然と感じる傾向もあり、難解である。

作文産出問題からは母語干渉の影響も観察できる。干渉の例として「投げあう」の産出文に、「事情の解決法はなく二人はこの問題を投げあいました」「相手に投げあったのは勝利の象徴だ」など、意味不明な作文も多く見られた。「投げる」は中国語で「投、抛、扔」が「問題を放棄する」、「人を持ち上げて胴上げする」、のように日本語の「投げる」よりも多くの意味を有するため、学習者は中国語から類推して本動詞の意味からこのような用い方をしたのではないと思われる作文が見受けられた。表2に作文産出問題で中国人学習者が産出した文の例を示す。前頁の図2で示したタイプ2,3で誤用が多く現れているのが分かる。

6. 習得順位の探索と今後の課題

6.1 調査から見た習得順位

5.1, 5.2 でみたように文法判断テスト、作

表2 作文産出テストの回答例

タイプ	複合動詞	例文	受容度 (%)
1	助けあう	今度成功したのは皆でお互いに助け合ったからだ。	94
1	黙りこむ	何を聞いても返事しないで黙り込んでいる。	93
2	包みこむ	全部の食べ物をビニール袋で包み込んでください。	24
2	もぐりこむ	水中にもぐりこんで魚を取る。	44
3	住みこむ	きれいなところだから私はこの町に住みこむつもりだ。	48
3	食いこむ	李さんはいつも食いこんで太くなっちゃった。	38
4	請けあう	今度のイベントは私が請け合った。	67
4	申しこむ	座席の予約は前日までに申しこまなければならない。	85

(注) 表2中のタイプは図2の1～4と対応している。

表3 作文算出テストタイプ別受容度平均

タイプ	1	2	3	4
受容度平均 (%)	78	59	64	76

文産出テストともに、本動詞の意味に引きずられて複合動詞の意味を正しく理解できない、多義的な意味の全容を理解できていないなど共通の困難点を含んでいることが分かった。図3に調査から見た複合動詞の習得順位を示すが、複合動詞の習得での要はまず、本動詞を正しく理解すること、次に後項動詞のプロトタイプを正しく認識することが基本になる。本動詞の正しい理解と後項動詞のプロトタイプの意味の認識ができていれば、明確なプロトタイプの意味を示す場合の後項動詞と、本動詞と意味範囲が変わらない場合の前項動詞

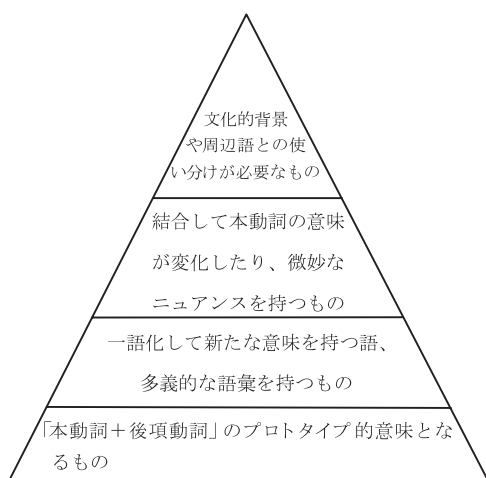


図3 複合動詞の習得順位

(注) 図3はある時点における習得率を示しており、三角形の上に行くほど難しい

が結合した複合動詞の習得はさほど問題にはならない。

6.2 西安外国語大学における日本語教育の問題点

ここまでの分析に加えて、今回の調査の対象である中国における中国人学習者が日本語の複合動詞を学習する際に母語や教材からいかなる影響を受けているかを考察することによって、学習者周辺の状況について一層正確な理解を期すことにした。まず、西安外国語大学で採用されている『中級日本語』(馮任遠、楊曉鐘編集(1996) 陝西人民出版社)という教材を例として複合動詞がどのように扱われているか調査した。テキストの本文中に出てくる複合動詞は新出単語として扱われるが、そのほとんどは対応する中国語の紹介のみである。また、言葉の表現法の学習項目として複合動詞は4語のみ複数の用例を掲載している。文法項目として複合動詞は導入されておらず、テキスト中に現れない語については関

連語の補習の機会が与えられないため、複合動詞の体系的な学習は期待できないと思われる。次に、中国で出版されている辞書『新日漢辞典(増訂版)』(大連外国語学院(1997) 遼寧人民出版社)での扱いについて「～あう」と「～こむ」を例にとって述べる。時間に制限のない相互動作を表す「～あう」は「信じあう」(相信)、「愛しあう」(互愛)のように中国語では主に「相」、「互」に相当する。また、共同動作を表す場合は「一块(一緒に)」を伴って用いることができる。しかし、「教えあう」や「招きあう」のような主体が交互に入れ替わるような単語は辞書に掲載されておらず、また「行きあう」や「請けあう」などのような特別な意味を表す語は全く違った表現で表している。同様なことが「～こむ」に対しても言える。「ひっこむ」(縮進)や「紛れこむ」(混進)のように内部移動を表すような場合に限っては「進」、「入」に対応させることができるが、状態の継続や繰り返しを表す場合には「思い込む」(坚信, 完全相信)や使い込む(花过头了, 用慣)のように説明的な表現や別の新しい表現となってしまう。学習者はよりプロトタイプの意味の段階で学習を止めてしまうか、後項動詞の意味の煩雑さに混乱してしまう可能性が高い。中国語には結合することで補足的な意味を付加させる程度の複合動詞しか存在せず、そのことから日本語の複合動詞を理解するにあたり、過剰に前項動詞の意味に依存する傾向も伺える。

最後に、中国人学習者の用いている辞書の例文の妥当性について「～あう」と「～こむ」を2例ずつ挙げて、触れておく。『新日漢辞典(増訂版)』(大連外国語学院(1997) 遼寧人民出版社)から、学習者のエラー例文と類

似した用例文を抜粋していく。「～あう」の方は「触れあう」が p. 1950 に「民衆の心に触れあう政治」という例文をのせているが、多くの日本人母語話者はこの文を「～あう」の過剰汎化と判断している。また、「出あう」に対しても「今日は彼に出会わなかった」という例文が p. 1442 に載っている。学習者の産出した文にも同様のものがあり、辞書の影響を受けたものと見られるが、母語話者はこの使用法を、「出あう」の代表的な意味を十分に表せてはおらず、状況次第では不自然であるとコメントしている。同様に、「～こむ」の例文も参考にしてみると、学習者の産出した「彼との愛情が溶けこんだ」や「四年間一緒に住んで今はもう溶けこんだ」などの文に対応するように「二人の感情が溶けこんだ。」という用例が p. 1540 にある。これは「溶けこむ」の意味範囲を拡大解釈したものとして日本語母語話者には受容されていない。また、学習者のほとんどが同様の例文を産出し、しかも日本人母語話者の感覚では、あまり用いない表現であると指摘があった「縫いこむ」もやはり、辞書 p. 1663 に「札を着物に縫いこむ」とあり、学習者はこれを見て、日本でも「縫いこむ」をこのように使用すると学習し、それが固着化したのではないと思われる。

6.3 複合動詞の指導法に関する一考察

第一言語習得と第二言語習得の顕著な違いの一つは、第二言語習得には習得に利用できる時間に制約があるという点である。従って、第二言語習得研究の目的はある時間的制約の中で如何に効率よく学べるかを模索し、その支援のための方法を構築していくことである。そこで第二言語を学習する際に最も一般的に用いられるのが辞書である。しかし、現状で

は 6.2 で見たような問題点が山積している。また、中国の日本語教育現場に従事する教師は中国語母語話者が大多数を占めているのが現状である。したがって、複合動詞を教授する際、今後は改良された専用の辞書や参考書が必要と思われる。上記の調査と考察を踏まえると、複合動詞の習得支援をいかにして行うかということを考えるべきである。本研究では、対象とした二つの複合動詞を中心に実証的な研究を行い、個々の複合動詞の習得順位やグループ化した習得階層を提出した。次に、次の階層にある一語化した複合動詞の取り扱いだが、これらは新出単語として学習した方が学習者には混乱を避けることができるかもしれない。以上の二つの階層に対して後項動詞と結合することによって本動詞の意味範囲が変化したり、多義的な意味を帯びようになるメカニズムの習得は難しく、指導側からの的確な教授が必要である。この点、母語話者は会話によって使い分けや結合条件を自然に会得できるが、外国人学習者は、本動詞の意味範囲の変化や多義的な意味の理解は困難である。とくに産出能力に合わせた周辺語との使い分けや、文化的背景なども身につくように具体例を豊富に交えた教授が必要である。

またプロトタイプ理論を用い、複合動詞の様々な用法について、本動詞の意味変化に関する図式を提示し、その図式のどこが強調され、またどのように発展的に応用されるかを提案した。学習者母語との対訳にのみ依存する方法では、本来連続した内部構造を持つはずの意味が分断してしまい、有効な学習支援は難しいと考えられる。現行の学習辞典における「～あう」と「～こむ」の意味記述を再検討し、改訂する場合、より良質で効果的な

ものにするためには習慣や社会的な背景も問題となってくるため、中国語に堪能な日本人と日本語に精通している中国人の研究者の協力が必要である。学習者に正確で明確なプロトタイプを内在化させるためには、語義リストや辞書などの対訳だけでは母語の干渉を引き起こしてしまう恐れがあるため、相当量の良質な用例も必要である。そのほか、本動詞との関わり、類義語との意味的差異や使い分け、後項動詞の作用なども含まれるのが望ましい。

さらに、何らかの文法上の説明がなければ、学習者自身が本動詞の意味範囲で複合動詞を解釈したり、多義語に対しては一面しか捉えられないことも起こりえる。「助けあう」「黙りこむ」のような母語からの正の転移の観察されるような複合動詞の場合は最大限母語を利用し、教授するのがよい。その一方、「触れあう」「絞りこむ」や「埋めこむ」のような負の転移の観察されるような複合動詞の場合は、中国語と比較しながら、後項動詞は本動詞とどういうふうに関わっているのか、中国語とのメカニズムの差異を明確に説明することが大切である。

本研究の習得モデルによる習得段階が示したようなステップで、複合動詞と段階的に教材内のテキスト文中に取り入れ、教師側は習得モデルの困難点に留意しつつ、複合動詞が現れるごとに学習者に喚起させていけば、学習者の複合動詞に対する捉え方も変わってくるはずである。

6.4 今後の課題

最後に、本研究で取り上げることが出来なかったか不十分であった事項、また本研究を通してより明確になった問題などがいくつか

存在するため、以下にまとめる。

複合動詞の微妙なニュアンスは生の実例に大量に触れることが重要ともいえる。それに加えて、語の共起関係の情報も重要であり、そのためにはコーパスを利用した効率的な用例の検索と KWIC (key word in context) 形式のような前後の共起環境の提示も有効であるように思われる。

また、学習者は本動詞の意味から複合動詞の意味を類推している傾向があり、複合動詞の習得状況の把握やモデルの提示について、学習者の本動詞自体の習得程度の影響というものを考慮しなければならない。しかし、今回の調査では本動詞の習得状況についてまでは調査を行っていなかったので本動詞の習得状況が複合動詞の習得状況と混同されている可能性がある。

さらに今回の調査は中国における中国人学習者を対象に、教室でのインプットしか受けられない学習者だけを対象として調査したので、教材・指導法が同一である可能性が高い。そのため学習環境の異なる学習者についても対象とする必要性がある。

本研究では後項動詞「～あう」、「～こむ」を事例として学習者の調査、考察を行ったが、日本語母語話者の使用実態の調査と習得順位の探索を行い、本研究で得られた結果について、中国人学習者について特有の特徴と、日本語母語話者との共通の特徴を峻別することも視野に入れる。最後に複合動詞全般について考察するには、「使いきる」の「～きる」、「思いだす」の「～だす」、「受けとる」の「～とる」など他の多くの多義の後項動詞についても広く扱う必要があるのはいうまでもない。

参考文献

- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 許夏珮. 2001. 「日本語学習者によるテイタの習得に関する研究」『日本語教育』 115: 41-50.
- 国立国語研究所. 1987. 『複合動詞資料集』.
- Tamaoka Katsuo, Hyunjung Lim, Hiromu Sakai. 2004. "Statistical Analysis of Frequency Data of Lexical and Syntactic Compound Verbs Taken from Corpora of Japanese Newspapers and Novels." 『日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究』 平成13年度～平成15年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)(研究課題番号 13480069).
- 陳曦. 2004. 「中国人学習者における複合動詞の習得に関する一考察—「～あう」と「～こむ」の理解に基づいて—」『ことばの科学』 17: 59-79.
- 寺村秀夫. 1978. 『日本語の文法(上)』 日本語教育指導参考書 4. 国立国語研究所.
- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味 II』 くろしお出版.
- 姫野昌子. 1999. 『複合動詞の構造と意味用法』 ひつじ書房.
- 馮富榮. 1999. 『日本語学習における母語の影響』 風間書房.
- 馮任遠・楊曉鐘. 1996. 『中級日本語』 陝西人民出版社.
- 松田文子. 2001. 「コア図式を用いた複合動詞後項「～こむ」の認知意味論的説明」『日本語教育』 111: 16-25.
- 松田文子. 2002. 「日本語学習者による複合動詞「～こむ」の習得」『日本語教育論集 世界の日本語教育』 12: 43-59.
- 松田文子. 2004. 『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して』 ひつじ書房.
- 森田良行. 1994. 「動詞の複合における意味構成」『動詞の意味論的文法研究』 明治書院.
- 山本清隆. 1984. 「複合動詞の格支配」『都大論究』 21: 32-49.
- 由本陽子. 1996. 「語形成と語彙概念構造」奥田博之教授退官記念論文集『言語と文化の諸相』 英宝社 105-118.
- 由本陽子. 1997. 「複合動詞を作る『～直す』の意味構造—英語の re- との相違を参考に—」『言語と文化と対話』 英宝社. 177-191.
- Rosch, E. 1973. "On the internal structure of perceptual and semantic categories." Cognitive development and the acquisition of language. ed. Moore, T. New York: Academic Press. 111-144.
- 愛知大学中日大辞典編纂処編. 1987. 『中日大辞典 増訂第二版』 大修館書店.
- 大連外国語学院. 1997. 『新日漢辞典(増訂版)』 遼寧人民出版社.